「本物の舞台芸術体験事業」を開催して

福島県相馬郡飯舘村は、阿武隈山地の北部に位置する人口約六六〇〇人の小さな山間地です。平成の大合併をしないで「大いなる田舎、まで*いライフいいたて」を掲げ自立の道を選びました。平成一八年九月三〇日で立村五〇周年を迎えました。「立村五〇周年記念祭」の一つとして、九月二九日に村立飯舘中学校を会場としてセントラル愛知交響楽団をお迎えして、「本物の舞台芸術体験事業」を開催いたしました。会場には、村内の三つの小学校、飯舘中学校、県立相馬農業高等学校飯舘分校の全児童・生徒と村民の約六〇〇人が詰めかけ、約七〇人の楽団員の、美しく迫力ある演奏に心を奪われました。

次に紹介するのは、演奏を聞いての児童・生徒の感想です。

「九月二九日、セントラル愛知交響楽団の方々が来て、村内の小中高すべての生徒が中学校の体育館で素晴らしい演奏を聞かせていただきました。僕は、オーケストラを生で聞いたことがなかったので、今回の演奏会はとてもいい経験になりました。一度は聞いたことはある曲ばかりでした。詳しく楽器の説明をしてくれたりと楽しい時間を過ごせました。立村五〇周年を記念して行われた今回の演奏会は、みんなの心に残るものになったと思います。素晴らしい演奏をしてくれたセントラル愛知交響楽団の方々に心から感謝いたします」

「私はセントラル愛知交響楽団の演奏を聞いて一番印象深かった曲は、三曲目のスメタナ交響詩〈我が祖国〉より『モルダウ』という曲です。この曲は、私が小学四年生の頃、村音楽祭でリコーダーで演奏しました。私は、プログラムに書いてあるのを見た時に、オーケストラが演奏する『モルダウ』はどんな感じになるのかなと思い、とてもこの曲を聞くのを楽しみにしていました。実際に聞いてみると、とても音色がきれいで、弦楽器と管楽器の音がきれいに重なりあっていてとても感動しました。この曲だけでなく全部あわせて六曲演奏してくれました。箏と尺八、そして、吹奏楽部と一緒に演奏もしてくれました。中には、私たちが知っている曲もあり、楽しく鑑賞することができました。最後の全員合唱では、自分なりに声を大きく出し歌うことができました。今回は、立村五〇周年を記念しての演奏会が開かれました。これからも、村民全員で協力して飯舘村を築いていけたらいいです」

団員と共演する福島県飯舘村立飯舘中学校吹奏楽部員

バイオリンの紹介

「今回のセントラル愛知交響楽団を聞いて、すべてがきれいで、すべてがすごかったが、その中で特に印象的だったのが三つあります。一つはハープの音です。小さい音がとても優しい感じで眠たくなりました。夜眠れない時やつかれている時など聞きたいなと思いました。二つ目は、指揮者の山田和樹さんです。私が今まで思っていた穏やかな感じではなく、体全体を使って指揮をしていたので、すごい迫力でした。最後は、『我が祖国』の演奏です。川の流れを表していると聞いた時、どんな演奏になるんだろうと思いました。実際に聞いてみると、強弱がとても多い曲でびっくりしました。また、川の流れがはっきりわかるように演奏していて心に響きました。機会があったらまた聞きたいです」

指揮者，ソリストに花束を贈る児童たち

演奏に聴き入る児童・生徒

今回の講演会の一か月前に団員四人の方が飯舘中学校に来校し、合同演奏曲の指導をいただきました。緊張して曲にならなかった吹奏楽部の生徒は、ひたすら猛特訓をしました。ある吹奏楽部の生徒は、次のような感想を書きました。

「楽団の人たちの演奏はやはりすごかった。同じ楽器を吹いていても、吹く人によって音は変わるものだと、改めて思いました。ソロを吹いても緊張しすぎて音が震えていました。でも、震えてはいたけど、今までの中では一番上手に吹けたと自分では思うので、ある意味、よかったです。また、合同演奏という中で一緒に吹けたということも、ソロを吹くことができたということも、立村五〇周年があったからこそできた体験なので、村長さんをはじめ、多くの人に感謝しています。楽団の人の演奏は、やはり自分が吹いている楽器が気になってしかたがありませんでした。トランペットであんなに高音を出すことになれているから、もちろん他の楽器を含め、自分の楽器についてよく知っているから、楽器と自分の間に見えない信頼関係が生まれ、ああいうきれいな音、そして、演奏につながるのではないかと思いました。演奏会で学んだことを部活で生かしていこうと思いました。とても思い出になった演奏会でした」

この飯舘中学校の吹奏楽部は県小中学校音楽祭「合奏」相馬地区大会に出場し、みごと最優秀賞に輝き、県大会に出場しました。本物に触れ、感動する心を発見し、村への熱い思いをもつことができた事業になりました。

（福島県飯舘村立飯舘中学校長　島　義一）

＊「までい」とは方言で「手間暇かけて丁寧に」という意味。